怖い客

矢樹 純

〈サトリ夫人〉

一

ポケット部分に書店のロゴがプリントされた紺地のエプロンを身につけると、相良亜弓（さがら あゆみ）は事務室のドアを開けた。従業員入口の自販機で買ってきたホットのほうじ茶で手指を温めながら、ノートパソコンを開き、メールをチェックする。昨日、退勤前にＰＯＰやパネルなどの拡材の催促（さいそく）をした版元からは、まだ返信がなかった。フェアの開始日までもう何日もないのにと焦（あせ）りが募る。

午後まで待って返信がなければ電話しようと、スマホのスケジュールアプリに入力する。キャンペーンの申し込みメールを応募者リストに振り分けて売場に出ると、店長の成尾修（なりおおさむ）が今日並べる書籍の荷分けをしているところだった。

「おはようございます。どれから運びますか」

努めて明るい語調を心がけ、声をかけた。振り返った成尾は、ややぎこちなく「ああ、おはよう」と返しつつ、手にしていた女性ファッション誌の束をゆっくりと平台に降ろして腰を伸ばす。昨年秋に四十五歳にして初めてのぎっくり腰を経験してから、成尾は重いものを持ち上げる動作に慎重になった。

千葉県柏(かしわ)市のショッピングモール内の書店《朱津(あかつ)書店シティプラザ柏店》では揃いのエプロン以外に服装規定はなく、成尾はチノパンにストライプのカッターシャツ、亜弓はカットソーにジーンズという格好だった。二人とも二月にしては少々薄着だが、暖房の効いた店内では少し動き回っただけで汗をかくため、これくらいでちょうど良かった。

「じゃあ、そこのコミック、今日発売の新刊なのでお願いします。あと文芸の方、台車に載せて棚の前に置いといたので」

眼鏡の位置を直した成尾は、亜弓から視線を逸(そ)らして通路の先を指差す。よそよそしさの漂う口ぶりに、胃が重くなるのを感じながら「了解です」とコミックが詰まった段ボール箱を抱え上げた。薄茶色の包み紙から覗く背表紙は少年誌のレーベルで、アニメ化されている作品もいくつかある。そのため冊数が多く、かなりの重量だった。

亜弓はコミック担当ではないが、今日のように担当者が遅番の時

は、代わりに品出しをしている。文芸の平台も新刊発売に合わせて商品を入れ替える予定で、早く終わらせて自分の売場を作りたかった。台車を取りに行く手間を惜しんでそのまま奥のコミック売場に進む。背筋を伸ばして荷物をお腹に密着させ、腰に負担が掛からないよう注意した。

亜弓も三十代になって疲れが翌日に残ることが増え、成尾ほどではないが腰痛にも悩まされている。なるべく肉体労働は若いスタッフに任せたいのだが、少ない人数で回す朝の時間帯は、それもなかなか難しい。特に保育園児の娘を育てる亜弓は、お迎えの時間に間に合うよう早番に入ることが多いため、どうしても開店準備と品出し業務がセットになってしまうのだ。

手早くコミックを五冊ずつ上下の向きを変えて積み上げる。売れ数が把握しやすく、なおかつ崩れにくいので、朱津書店ではこうして陳列するよう指導されていた。コミックの品出しを終えると空になった段ボールを畳みながら自身の売場へと向かう。台車の新刊の薄紙を剥がし、発注数と合っていることを確認したのち、まずは先月出たいくつかの商品を台車に移動させた。空いたスペースに手前に並んでいたベストセラーや売れ筋商品を下げると、今日発売となった直木賞作家の受賞後第一作となる分厚い社会派ミステリー小説を、左右上下二列ずつ積み上げていく。

深海魚の写真がデザインされたブルーを基調としたカバーに、「直木賞後受賞第一作」と大きなフォントが目立つ黄色い帯が映えている。四面並ぶと相当な迫力だ。コミックに比べ、文芸は売上が低く、長らく文芸担当をしている亜弓は肩身の狭い思いをすることが多い。せめて注目作が続く今月は、しっかり実績を上げたかった。

週末の新聞に書評が出た歴史小説、データから売れ筋と判断したライト文芸を前面に移動させ、ざっと平台と棚の商品整理が済んだところで腕時計を見る。開店まであと二十分。これならレジ開けの前に片づくと踏んで、拡材を取りに事務室に戻った。

「あ、相良さん、おはようございます。今朝も寒いですねー」

ドアを開けると、ちょうど出勤してきたアルバイトの倉重詩織（くらしげしおり）がエプロンをつけているところだった。冷え性の詩織は、チェックのシャツに厚手のニットを重ね、下はロングスカートにタイツという格好だ。短大卒で年齢は亜弓の少し下の二十九歳。二年前から朱津書店でアルバイトとして働いている。裏表のない性格で、一度は不動産会社に就職したものの人間関係に疲れて地元に戻ってきたと、あっけらかんと教えてくれた。

「支度が済んだら、レジ開け先に始めちゃっててくれる？　私、まだちょっとディスプレイが終わってなくて」

拡材の棚から、昨日のうちに用意していたＰＯＰとＡ４パネル、

什器などを取り出しつつ頼んだ。

「分かりました。じゃあ釣銭もらってきますね。店長は売場ですか？」

シティプラザ柏では、モール内の専門店の売上や釣銭などの現金は一律モールのバックヤードにある納金室で行うことになっていた。釣銭の受取票やレジ開けに必要な鍵は、店長の成尾が管理している。

事務室にいないということは、成尾はまだ作業中なのだろう。「うん、品出ししてると思う」と返すと、エプロンの胸にネームプレートをつけながら、そっと詩織が身を寄せてきた。

「店長との面談、これからですか？」

気づかわしげに眉を曇らせ、小声で切り出す。

一週間前、亜弓はこのところ頻繁に訪れるようになった特定の客について、対応に悩んでいると成尾に相談した。そして昨日の退勤時、成尾に呼び止められ、やっと対策を考えてもらえたのかと喜んだのも束の間、予期せぬことを告げられた。

「相良さんがお客様とトラブルになったという件で、いくつか確認させてほしい」

今日の午前中に面談をしたいと言われた。まるで亜弓の方に要因があるというような物言いだ。悩んではいたが、トラブルとまでは捉えていなかったため、大仰な姿勢に亜弓は困惑するばかりだった。

小学校時代から休み時間はずっと図書室に入り浸っていたほどの

読書好きで、公立大学の文学部を卒業後、本に関わる仕事がしたいという思いから関東を中心にチェーン展開する朱津書店に入社した。埼玉県の店舗に配属となり経験を積んだのち、今の店への異動が決まった。それを機に学生時代から付き合ってきた会社員の夫と籍を入れ、三年前には長女が誕生し、育休を経て復帰した。

シティプラザ柏店に赴任してから五年、成尾から仕事ぶりについて、深刻な注意を受けたことはなかった。部門売上こそ振るわないが、亜弓の接客はスタッフたちからも評価されており、問い合わせへの対応も丁寧で的確だと自負していた。お客様アンケートで名指しで褒められたことも何度かあり、先ほどの態度からしても成尾自身、ここへ来て亜弓が問題を起こしたことに戸惑っているふうだった。

「やっと店長も動いてくれて良かったですね。《サトリ夫人》のせいで相良さんがどれだけ時間をロスしてるか、ちゃんと言った方がいいですよ」

このあとの面談が、例の客への対応策を相談する場だと考えているらしい。詩織は憤慨した様子で腕を組む。お客をあだ名で呼ぶことを、今はわざわざ咎める気力が湧かず、亜弓はただ「うん、そうするつもりだけど……」と返した。

《サトリ夫人》というのは、成尾に相談を持ちかけた亜弓の悩みの

種である常連客――國村仁美（くにむらひとみ）にスタッフたちがつけたあだ名だ。最初に呼び始めたのは児童書担当の女性アルバイトで、國村仁美の来店時の振る舞いが、子供向けの妖怪事典に載っている《サトリ》という妖怪に似ているというのが理由だった。

「でも、國村様に他意はないし、私の方にも何か問題があるのかもしれない。きちんと國村様の要望を聞き取れていたら、毎回ああいうことにはならないと思うし」

國村仁美が最初にシティプラザ柏の朱津書店を訪れたのは、昨年の十一月下旬、日曜の夕方近くのことだった。

三連休の中日とあって家族客も多く、スタッフ一同いつも以上に忙しく品出しや接客、レジ対応に追われていた。亜弓は退勤時間が迫る中、会計の列が落ち着くのを見計らい、カウンター内で毎週日曜に行う伝票整理をしていた。

「すみません。ちょっと、よろしいかしら」

落ち着いた声音に顔を上げると、『レジ休止中』のプレート越しに、小柄な女性がこちらを覗（のぞ）き込んでいた。「はい、いらっしゃいませ」と伝票を脇（わき）に避けてそちらに向かう。

「探している本があるんだけれど、お店にないみたいだから、取り寄せをお願いしたくて」

ベージュのダウンコートに身を包んだ女性は、申しわけなさそう

に眉を八の字にした。茶色に染めた豊かな髪は若々しいが、額と目尻、口元には深い皺が刻まれ、顔だけ見ると老婆のようにも思える。落ち窪んだ小さな瞳は色素が薄く、一種独特の迫力があった。年齢不詳の外見に少々たじろぎつつも、亜弓は笑顔でエプロンのポケットからメモ用紙を取り出した。

「でしたらまず、店内に在庫がないかお調べさせていただきます。お探しの書籍のタイトルを教えていただけますか」

女性はそこで、はたと首を傾げた。「それがねえ……」とますます眉尻を下げ、「はっきりと思い出せないのよ」と打ち明ける。

「『何々したければ、何々しなさい』、みたいなタイトルで、お医者さんが書いた健康法の本なの。実践すると長生きができるというので、雑誌か新聞で少し前に見かけたと思うんだけど」

はあ、承知しました、と聞き取った内容をメモしつつも、これは絞り込むことが難しそうだと感じた。ありがちな言い回しのタイトルに加え、どんな健康本なのかもはっきりしない。しかし雑誌や新聞に少し前に広告が出ていたというなら、発行されたのは最近のはずだ。

念のため、出版社や著者名などは分からないかと尋ねたが、女性は覚えていないという。ただ、カバーにあった医者の風貌は覚えているので、表紙を見せてもらえれば判別できるとのことだった。

亜弓はカウンター内の端末で、ここ半年ほどの間に出版された健康書をリストアップした。そのうち、著者の医師の写真が書影となっているものを確認してもらったが、女性客はどれも違うと首を横に振った。

「そうなるとちょっと、これ以上お調べするのは難しいのですが……」

この時点で、接客を始めてから十数分が経過していた。そろそろ潮時（しおどき）と考え、亜弓は「お役に立てず、申しわけありません」と詫（わ）びた。だが通常であれば諦（あきら）めるであろう局面で、女性客は一向に立ち去る気配を見せない。

「もしかすると、お医者さんが表紙になってるというのは、勘違いだったのかも。きっと広告に写真が出ていたのを、表紙だと思い込んじゃったんだわ」

だとすれば、どんな装幀かも覚えていないことになり、さらに選択肢が広がってしまう。これ以上接客を続ければ、退勤時間を過ぎるのは確実だった。しかし誰かに代わってもらおうにも、折悪しくレジには会計の列ができていた。

結局この日、亜弓は退勤時間を十分過ぎるまで女性が求める本を探すのに付き合った。

「これよ。この老夫婦のイラストの表紙、覚えてる」と、ついに見つ

かった該当(がいとう)の書籍は『九割が知らない超長生き健康法　免疫力を高めて百歳まで生きる』で、当初聞かされたのとまったく似ても似つかないタイトルだった。昨年五月に発行されており、在庫がなく取り寄せとなった。

「あ、ごめんなさい。自分の苗字なのに間違えちゃった」

癖(くせ)のある字で「村國(むらくに)」と書き損じた購入申込書をひらひらさせ、修正テープを貸してほしいという。

「なんでか昔から、逆に書いちゃうのよねえ。ただでさえそそっかしいのに、五十超えたら今度は物覚えまで悪くなって、ほんと嫌になっちゃう」

愚痴(ぐち)を聞きながら必要事項を記入してもらうのに、亜弓はさらに五分以上残業した。

「今日はお時間取らせて悪かったわね。お店で頼む前に、本の題名くらいちゃんと確認してこないと駄目よねえ」

ダウンコートの背中を丸め、しゅんとしてペンを返しながら、國村仁美はまさに亜弓の心中を言い当てた。

笑顔を保って仁美を見送ったあと、すぐ事務室に引き取り、保育園に電話して延長保育を頼んだ。応対に出た副園長に「直前の連絡は困ります」と嫌味を言われつつ急いで退勤準備をし、一人娘の華菜(かな)を迎えに行ったのだった。

「サトリ夫人って、最初に親切にしてもらったから……とか言って、なんでも相良さんにお願いしようとするじゃないですか。あれがすでにカスハラだと思うんですよね」

仁美の行為をカスハラ――カスタマーハラスメントと断じた詩織は、唇を尖らせながらもてきぱきとデスクの引き出しを開け、釣銭を入れる専用の鍵付きポーチを取り出した。

実際、それから國村仁美は週に二回ほどのペースで来店し、わざわざ亜弓を指名しておすすめの本を提案してほしいと求めたり、はたまた最初の来店時のように記憶のあやふやな書籍を探してほしいと頼んだりするようになった。毎度応対に時間が掛かる上、思い出せない苛々から「あぁ、もう、どうしてメモを取らなかったのかしら！」などとヒステリックに喚(わめ)くこともあり、徐々に行動もエスカレートしている。

「私も、他のスタッフも、相良さんに引き継がないで済むように努力はしてるんですよ。でも『相良は席を外しております』『別のお客様を接客中で』って伝えても、じゃあ戻るまで待つって聞かなくて」

事務室で電話応対や書類仕事などをしていると、詩織が遠慮(えんりょ)がちに呼びにくるということがよくあった。

「相良さんが毎回サトリ夫人の相手してるの見ると、正直、社員じ

ゃなくて良かったって思いますよ。私だったら耐えられないですもん。他のアルバイトの子も、『自分なら最初の一回目で爆発してる』って言ってましたよ。だってあの人、わざとやってんのかってくらい間が悪いじゃないですか」

詩織らしいあけすけな物言いに、「ちょっと、酷いよ」と苦笑しながらも、心の内で深く同意する。仁美が亜弓を信頼してくれることも、接客から購入に繋がることもありがたくはあるのだが、彼女が何かを頼んでくるタイミングは大抵、亜弓の退勤間際のことなのだ。

通常であれば退勤前に成尾や他の社員に業務の引き継ぎを行い、日報に書ききれなかったことなどを口頭で報告するのだが、仁美の相手をした日はその時間が取れず、慌てて店を出ることになる。仁美自身、毎回仕事終わりに来店していてその時間帯になるのかもしれないが、彼女の接客には、とにかく時間と精神力を消耗させられるのが悩みだった。

たとえば彼女が姪っ子に絵本を贈りたいというので学齢を訊き、人気の絵本や女児が気に入りそうな絵本をいくつか選んでやると、その中から一冊を選ぶのに二十分近くも悩みながら、「これはどういうお話なの？」「こっちは？」と、内容についてあれこれと詳細を尋ねてくる。そして退勤時間を過ぎてようやく購入商品が決まったところで、いかにも申しわけなさそうにこぼすのだ。

「相良さんを捕まえて長々と説明させるより、選んでもらったものを自分で読み比べれば良かったのよね。忙しいのに、ごめんなさいね」

あたかも亜弓の内心を見透(みす)かしたような詫びの言葉に、ではなぜそうしてくれなかったのか――と、いつも嘆きたくなる。

《サトリ夫人》のあだ名をつけた児童書担当のスタッフによれば、サトリは山の奥に住む妖怪で、猿のような見た目をしているのだという。山中に立ち入った人間の前に現れては人の心を読み、取って食おうとするのだそうだ。説明を聞いた時は、なるほどと思った。

確かに彼女が最後に付け加える一言は、まるでサトリに心を読まれたかのようだ。また失礼ながら、言われてみれば國村仁美の顔つきは少々猿に似ているようにも見える。最初のうちは社員として、お客に変なあだ名をつけないようにとスタッフたちに注意していたが、仁美の接客で何度も残業を繰り返すうち、次第に亜弓も黙認するようになってしまった。

「國村様の接客が私に集中しないように、配慮(はいりょ)してもらえないかとお願いしたんだけど、店長にしてみれば『社員が甘えるな』って感じなのかな」

管理職の立場で考えれば、人員が足りているとは言えない売場でスタッフが頻繁に一人の客対応のために時間を取られていること自

体、一種のトラブルだ。今日の面談は、入社十年のベテランである亜弓に成長をうながすための、指導の場なのかもしれない。

「いや、相良さんの接客は、みんなお手本にしているくらいですよ。前に《お客さまの声》に、相良さんの名前入りで感謝のお手紙が届いたこともあったじゃないですか」

詩織は取りなすように昨年のことを持ち出した。《お客さまの声》はシティプラザ柏の一階ロビーに設置された掲示板で、店内の何箇所かに置いてあるアンケート用紙や、ホームページの投稿フォームから届くお客からの意見や要望を貼り出していた。昨年の春頃に届いたのは手書きのアンケート用紙で、記入者の氏名の部分はプライバシーに配慮して消されていたが、亜弓には誰が書いたものかすぐに分かった。

「確か、時刻表はどこにあるのかってお尋ねになったお客様でしたよね。相良さんに、二種類の時刻表の違いを丁寧に説明してもらったって喜んでおられて」

「榊原（さかきばら）様ね。私の父が鉄道好きだから、書店員の知識というより父の受け売りだったんだけど」

鉄道ファンならこちらを、と亜弓が勧めた方の時刻表を、嬉しそうに買っていった姿を思い出す。榊原勇雄（いさお）は背が高く、細身のスーツが似合うダンディな見た目で、もうすぐ定年と言っていたので六

十近いだろう。以前からたまに朱津書店を利用していたとのことだが、亜弓が応対してから、仕事帰りによく立ち寄るようになった。

鉄道好きとあって几帳面な性格なのか、榊原は手に取った本は綺麗に角を揃え、元あった場所にきちんと戻してくれた。取り寄せを頼んだ際は、入荷の連絡をすると必ず二日以内に来店する生真面目さで、鉄道雑誌の定期購読に加え、旅雑誌や紀行本などをしょっちゅう買ってくれる常連客だった。

「そう言えば榊原様、最近来られないですよね。秋ぐらいから見ていないような……お加減でも悪くされたんでしょうか」

ふと詩織が心配そうに漏らし、はっとする。あえて考えないようにしていたが、ちょうど彼の来店が途絶える前に、榊原との間に少しだけ気まずい出来事があった。もしかするとタイミングが合わず、自分が会えていないだけかと考えていたのだが、やはりあれ以来、榊原は店を訪れていないのか。

自分の言い方が悪かっただろうか――と内省に沈みかけて、今はそれどころではなかったと我に返る。開店前の慌ただしい時間に、長々と話し込んでいる余裕はない。

「きっとお忙しくされてるだけだよ。それより、ほら、もう行かないと」

詩織をうながし、自身も拡材を抱えて売場に戻った。『直木賞受賞

後第一作！』のＡ４パネルをアイキャッチとしてエンドのど真ん中に立てると、昨晩華菜を寝かしつけてから頑張って手描きしたイラスト入りの《書店員一押し！》のＰＯＰを飾る。ポスターがあればもっと目立たせることができるのだが、そちらは大型書店のみ配布のようで、割り当てがないのが残念だった。

多くのお客に手に取ってもらえるよう祈りつつ後片づけをしていると、「相良さん」と成尾から声が掛かった。

「レジ開けはアルバイトさんで足りてるから、今のうちに」

事務室の方へ足を向けながら手招きされる。開店直後の来客の少ないうちに済ませようということらしいが、相変わらず成尾の表情は硬く、不安を掻き立てられた。

他のスタッフは全員売場に出ており、事務室には誰もいなかった。成尾はデスクの椅子に掛けると、隣の椅子を引き、亜弓に座るように言った。成尾の方へ体を向けると、亜弓は「國村様のことですけど……」と自分から口を切った。

「やっぱり特別な対策をしていただく必要はないです。私なりに、もっと効率的にお話を伺えるように工夫するべきかと考えていて」

先回りして弁明する亜弓に、なぜか成尾は当惑した顔になる。

「それって前に相談された、接客に時間が掛かるって話のこと？僕がトラブルと言ったのはその件じゃないよ。実は相良さんを名指

しする形で、《お客さまの声》にクレームが届いていてね」
「え……」と言ったきり、言葉が出てこなかった。てっきり國村仁美とのことを話し合うものと思い込んでいた。名指しでクレームを受けるなど、まったく心当たりがなかった。ここしばらくのことを思い返しても、接客でトラブルとなった記憶はない。
「具体的に、どういう内容なんでしょうか」
訝しみつつ尋ねると、成尾は険しい表情で、亜弓を正面から見据えた。一瞬言い淀んだのち、重い声音で告げる。
「相良さんが、店内の人目のない場所で、お子さんに暴力を振るっていたというんだ」

二

まるで身に覚えのない話に、亜弓は唖然とするあまり目を瞬かせた。思い当たるふしはあるかと成尾に問われ、勢い良く首を横に振る。
「そんなこと、するわけないじゃないですか」
つい声が大きくなり、剣幕に成尾が身を引いた。いくらなんでも酷いでたらめだ。じっとしていられない三歳の娘の華菜に対しても、言葉で叱ることはあっても、手を出したことは一度としてない。

「……いや、そうだよねえ。まさか相良さんに限って、あり得ないとは思ったけど」

途端に安堵（あんど）した様子で、成尾は肩を落とした。先ほどまでの強張った表情を緩ませ、大きく息を吐く。亜弓にしてみれば、たったさっきまで、わずかにでも疑われていたことが心外だった。

「その苦情というのは、いつ届いたんですか？　差し支えなければ、暴力を振るったという場所や、お子さんのご年齢、性別などを教えていただけないでしょうか」

どう考えてもいたずらか嫌がらせと思えたが、万が一、店内で子供の振る舞いについて亜弓が注意したのを、何か勘違いさせてしまったという可能性もある。それでも暴力と言われるとまるで目星がつかないが、詳細を聞けば何か思い出せるかもしれない。成尾は「順を追って説明するよ」とノートパソコンを開いた。

「投書があったのは先週のことで、シティプラザのホームページの投稿フォームから送られてきたそうだ。氏名や年齢、連絡先などは全部空欄（くうらん）だったけど、実在する従業員名の記載があるので悪ふざけとは即断できず、確認してほしいと言われてる」

タッチパッドに指を滑らせ、シティプラザ柏の総務部から送られてきたというメールを表示させる。『いつもお世話になっております』から始まるビジネスメールで、匿名（とくめい）の投稿のため信憑性（しんぴょうせい）は低いが、

念のため事実関係を確認してほしいとの要請のあとに、該当の投書のテキストファイルが添付(てんぷ)されていた。

《朱津書店の相良という女性が、高校生と思われる男の子を店の奥に連れていき、万引きをしただろうと問い詰め、床に引き倒していました》

簡潔な文面を読み終え、息を呑んだ。まさか、あのことなのか――と、体が硬直する。亜弓の顔色が変わったのを見て取ったのだろう。成尾が気づかわしげに身を乗り出す。

「先月、僕が休みの日に、確かに高校生の万引きがあったと日報に書いてあったよね。その日のうちに保護者と謝罪に来て、特にトラブルはなかったと認識してたけど」

「ええ。八幡蓮君(やはたれん)という、高校一年生の男の子です。もちろん暴力なんて振るってませんけど、でも……」

歯切れ悪く口ごもる。手のひらに汗がにじんできた。自身の膝を睨(にら)み、唇を噛む。

万引きについては翌日、退勤前に成尾に詳細を報告するつもりだった。だがその日は生憎(あいにく)時間が取れず、成尾に伝え損ねていたことがあった。

「ならやっぱり、投書の内容は事実じゃないんだね。総務の方にはそう回答しておくよ。しかし、なんでこんなおかしな言いがかりを

つけてきたのかな。匿名で送れるフォームだと、こういういたずらがあるから嫌だよね」

その日、事務室で何が起きたのか。説明するべきか迷う亜弓をよそに、成尾は話題を打ち切り、意識はすでに別の方へ向かっている。今となっては、言わなくてもいいことだ。実際、暴力など振るっていないのだから、蒸し返す必要はない。

「あの……そろそろ私はレジに入った方がいいかと思うんですけど」

腕時計に目をやり、腰を浮かせると、成尾は「ああ、もうこんな時間か」とパソコン画面に顔を向ける。

「他にもいくつか返信するメールがあるから、僕はしばらくここで作業してるよ。もし混んできたら呼んでくれるかな」

キーボードを叩き始めた成尾に一礼すると、ドアへと向かった。売場に戻り、まださほど忙しくなさそうなカウンター内に入る。

「あ、相良さん。面談、どうでしたか？　サトリ夫人の件、対応してもらえることになりました？」

包装用の紙袋の在庫を数えていた倉重詩織が、心配そうに尋ねてきた。國村仁美のことなど、すっかり頭から抜け落ちていた。

思えば万引きの件をきちんと報告できなかったのも、仁美の接客が原因だった。その日も彼女が退勤三十分前に来店し、分かりやすい法律の本を探しているという曖昧（あいまい）な問い合わせに対応していて時

間を取られたことで、お迎えの時間に間に合うよう急いで店を出なくてはいけなかった。

「ああ、うん。まあ……」と返事を濁し、客注伝票の整理を始める。今となっては國村仁美への対応でお迎えに遅れるといった問題は、なんとも牧歌的な悩みだと思えた。薄い紙の束を版元別に仕分けしながら、いったい誰が……と考えかけて、首を左右に振った。そんなの、決まっている。

あの密室で起きたことを知る者は――投書を行った可能性のある人物は、亜弓をおいて一人しかいなかった。

八幡蓮が来店したのは、一月の第二週。木曜日の午後二時過ぎのことだった。

制服のブレザー姿で、学校帰りらしくリュックを背負った彼は、一人で店を訪れた。身長は一六〇センチに届かないくらいで、亜弓よりも小柄で線が細かった。長めの前髪をセンター分けにしており、マスクで顔の下半分が隠れているが、切れ長の一重まぶたを伏せてうつむいて歩く様は、いかにも気弱そうな印象だった。

中高生の下校時間としては早い時間帯で、テスト期間なのかと思ったが、他に同じ制服の生徒は見当たらない。事情があって早退したのだろうか。文庫本コーナーで昼便で届いた分の品出しをしてい

た亜弓は、なんとなく気になって注意を向けていた。

それもあって、少年の行動にすぐ気づけたのだろう。芸能雑誌のコーナーをしばらく眺めていた彼が、棚差しとなっていたムック本を手に取った。女性アイドルグループのインタビューをまとめたもので、確か三千円近くしたはずだ。昨年発行されたものだが、何度か在庫の有無を聞かれたことがあったので覚えていた。

少年はムック本を手に、参考書のコーナーへと足を進めた。他にも買うものがあるのだろうと考えたが、少年はきょろきょろと周囲を気にする素振りを見せている。もしかすると……と、嫌な予感が芽生(めば)えた。

十年以上も書店勤務を続けていると、万引きを目撃するのは珍しいことではなかった。亜弓は品出しの手を止め、参考書コーナーから死角になるコミックの棚の通路に進んだ。ちょうどアニメ化が決まった作品の大きなパネルが棚の横に張り出していたので、その陰(かげ)に隠れて少年の様子を窺う。

先ほどまで背負っていたリュックが、足元に下ろされていた。背後から見られているとは気づいていないのか、少年は左右を確認すると、素早くリュックのファスナーを開け閉めし、元どおり背負い直した。再び歩き出した時、少年は手ぶらになっていた。

少年はそのまま、さして興味もないであろう児童書のコーナーを

物色しつつ店の外へと向かっていく。あとをついていった亜弓は、少年が書店の区画を出て、モールの通路を進もうとしたところで声をかけた。

「すみません。ちょっとよろしいですか」

少年の肩がびくりと震え、足が止まった。その反応だけで、間違いないと分かった。

亜弓は少年のそばへ寄ると、周囲に聞こえない程度の声量で「未精算の商品をお持ちのようなので、確認させてもらえますか」と告げた。

こちらを振り向いた少年の瞳は揺らぎ、元々白かった顔色は青ざめて見えたが、態度は落ち着いていた。「あ、はい……」としっかりした声で応じた。

「一旦、お店に戻ってもらえますか。奥の事務室でお話を伺うので」

通路を歩く客たちの視線から少年を守るように、少年に付き添って店内へと誘導した。

この日は店長の成尾はシフトが休みで、出勤しているもう一人の社員は亜弓より年次が下だった。レジに入っていた倉重詩織に目配せすると、事情を察した様子で作業中だった後輩社員に伝えに行ってくれた。売場を彼らに任せ、通路の奥のドアを開くと、少年を事務室に招き入れる。スタッフの休憩場所として使っている長机に少年

を座らせ、亜弓は向かいに腰を下ろした。
「ええと、じゃあ、自分で出してもらえるかな」
なるべく穏やかな口調で言った。一瞬ためらう気配を見せたが、少年は前に抱えていたリュックのファスナーを開け、ムック本を出すと机に置いた。
「すみませんでした」と不織布（ふしょくふ）マスク越しのこもった声で詫び、身を縮める。商品が確認できたところで、亜弓は壁の内線の子機を取った。
「こういうことがあった場合、シティプラザでは警備室に連絡する決まりになってるの。今後どうするかといったことは、そちらで相談してもらうことになるから」
感情を交えず淡々と伝えると、子機に登録された内線番号のリストから警備室を呼び出した。店舗名と自分の名を名乗り、万引き事案があったこと、当人は未成年で、事務室で保護している旨を伝える。これからスタッフを向かわせるとの返答があった。亜弓が話している間、少年は身動き一つせず、自身の足元を見つめていた。
やり取りを終え、再び少年の向かいに掛ける。沈黙が息苦しく、亜弓は何気ない調子で語りかけた。
「今日は午前授業だったのかな」
「あ、はい。ていうか、午後から学級閉鎖になって」

保育園でもインフルエンザが流行中だが、学級閉鎖中にわざわざアイドルのムック本を万引きしにきたのか。おそらくこのあと、保護者が呼び出されることになるのだろうが、息子の不始末にどれだけ落胆するだろうと他人事ながら気の毒になった。

改めて少年の顔を観察するが、覚えのないところを見ると、少なくとも常連客ではなさそうだ。制服もこの辺りでは見ないデザインで、もしかすると自宅や学校から離れた書店を選んでやってきたのかもしれない。

腕時計に目をやると、警備室に電話をしてから五分近く経過している。何か別の案件の対応中で、すぐには来られないのだろうか。

「そうだ。名前と学校名を教えてもらえるかな」

本来は警備員が聞き取りするところだが、手持ち無沙汰なのと、少しでも彼らの手間を減らそうというつもりで問いかけた。

「八幡蓮です」と名前を述べたきり、少年は黙り込んだ。見ると膝が細かく震えている。吐き気をこらえるように口元を押さえ、額には脂汗がにじんでいた。明らかに様子がおかしかった。

「大丈夫？」と声をかけた瞬間、八幡蓮の体が傾いだ。とっさに伸ばした腕が空を切る。リュックを抱えたまま、蓮は鈍い音を立てて床に転がった。がしゃん、とパイプ椅子が倒れる。

「ねえ、どうしたの？　八幡君！」

動揺しつつも呼びかけると、薄目を開けた蓮は横になったまま、うつろな眼差しで周囲を見回した。「すみません……」と細い声で詫びながら、手をついてのろのろと体を起こそうとする。目の前で起きた一連の顛末（てんまつ）を思い返したが、頭を打ってはいなかったはずだ。亜弓も手を貸し、彼が椅子に座り直すのを手伝う。

「多分、貧血です。緊張すると、たまにこうなるので」

途切れ途切れに説明し、目を伏せる。確かに、先ほどよりだいぶ顔色が悪かった。

「シャツのボタン外して、ネクタイも緩めた方がいいかも――。あ、ちょっと待ってね」

素直に指示に従った蓮に、冷蔵庫から来客用のペットボトルのお茶を出して渡した。しかし力が入らないのか、蓋を回すのに苦心している。開けてやると、蓮はゆっくりとした動作で口をつけた。

「怪我はなかった？」と確かめると、「多分、大丈夫です」といくぶんしっかりした口調で答えた。安堵しつつ様子を観察する。床に打ちつけたのか、手の甲に青痣（あおあざ）ができているが、出血はない。徐々に頬にも赤みが差してきた。そこへ「失礼します」と事務室のドアがノックされた。

面識のある制服姿の初老の警備員が「お疲れさまです」と入ってきた。万引きに気づいた経緯を簡単に伝えると、あとは警備室で対

応すると蓮に移動をうながした。

「あの、でも……」

たった今、貧血を起こして倒れたのだと伝えようとしたが、蓮はふらつく素振(そぶ)りもなく立ち上がり、警備員のあとについていく。ドアの前でこちらを振り返り、無言で会釈をすると、そのまま出ていった。

夕方、八幡蓮は迎えに来た母親とともに店舗に謝罪に訪れたそうだが、亜弓はすでに退勤しており、別の社員と詩織が対応したとのことだった。万引きは今回が初めてのようで、シティプラザ側も穏便に済ませることにしたらしい。母親は恐縮(きょうしゅく)した様子で、二度とこのようなことはさせないと頭を下げたという。

改めて当日のことを思い返してみても、蓮に暴力を振るったなどと非難される謂(い)われはない。万引き行為をしたと認めさせはしたが、問い詰めたわけではなく、威圧的な態度も取らなかった。なぜあのような密告めいた投書が届いたのか。

ただ、八幡蓮が貧血を起こして《床に倒れた》事実を知るのは、亜弓と蓮本人だけだ。理由は分からないが、あの投書は蓮が送ったと見るべきだろう。そんな雰囲気は感じ取れなかったが、万引きを見咎められたことを、恨みに思っていたのだろうか。

伝票を整理する手を止め、売場に視線を移す。いつしか事務室から出てきた成尾が、レジ前の平台の商品整理をしていた。

「ごめん、ちょっと抜けるね。版元さんに売場の写真送ることになってたんだ」

詩織に断ってカウンターを出ると、事務室に向かった。日報に記録してある八幡蓮の連絡先をメモ用紙に書き写し、ポケットに忍ばせる。それから午後までレジ打ち、品出し、在庫確認と業務をこなし、退勤時間を迎えた。幸い、國村仁美が来店することはなく、時間に余裕を持って従業員口を出る。

駐車場を横切り、駅方面に向かいながら、先ほどメモした八幡蓮のスマホの番号に電話した。

「はい――」という幼さが残る声で、八幡蓮本人だと分かった。「朱津書店シティプラザ柏店の相良です」と名乗ると、息を呑む気配があった。足を止め、大きく深呼吸する。気持ちを落ち着けたのち、静かに尋ねた。

「八幡君。どうして、あんなことをしたの？」

亜弓の問いかけに、八幡蓮は何も答えなかった。ただ通話を切る様子はなく、張り詰めた沈黙が流れる。

「きっと、理由があってしたことなんでしょう？　私、八幡君に何かした？」

再び問いを発した亜弓に、蓮はようやく言葉を返した。

「榊原勇雄さんを、覚えていますか」

予期しない質問に、一瞬頭が白くなった。なぜ彼の口から、常連客だった榊原勇雄の名前が出てくるのか。混乱しながらも「ええ……」と答える。蓮はふっと息を漏らした。笑ったのかと思ったが、そうではなかった。

「僕、榊原さんとは家が近所なんです。駅までのバスが一緒で、中学に入ってすぐの頃、僕が車内で貧血を起こした時に、榊原さんが席を譲ってくれて。いつも同じ時間に乗るから、だんだん親しくなって」

震える声が、次第に嗚咽(おえつ)交じりになる。

「榊原さん、去年の秋に、電車に飛び込んだんです。多分、相良さんに、万引き犯扱いされたことを、気に病んで――どうお詫びしたらいいか、分からないって言っていました」

三

榊原勇雄がその行為を、特に問題と捉えていなかったことは、はっきりしている。

いつもは鉄道や旅行関連のコーナーにいる榊原が、健康書のコー

ナーにいたので、「珍しいですね」と声をかけた。榊原は「いや、ちょっとね」と決まり悪そうにしながら、手にした健康雑誌を広げた。そして亜弓の目の前で、何気ない様子で開いたページにスマホのカメラを向けたのだ。

「あ、写真は駄目です。デジタル万引きになっちゃいますよ」

亜弓が注意すると、榊原はぎょっとした顔になった。とっさに「万引き」という強い言葉を口にしたことを後悔しつつ、購入前の書籍のページを写真に撮る行為は、窃盗(せっとう)には当たらないが代金を払わずに情報を取得することになり、マナー違反とされているのだと丁寧に説明した。

「そうなんだね。いや、この特集記事の内容が気になったものだから、知り合いに教えてあげたくて」

後ろめたさからか、榊原勇雄はぼそぼそと言いわけめいたことを口にした。

「一応、店内に撮影を禁止する旨のポスターなどを提示しているんですが、分かりにくくて申しわけありません」

榊原は、そんな決まりがあるとは知らなかったと詫び、首を垂(た)れていた。

「スマホが普及した最近になってできたルールなので、ご存じない方も多いと思います」

あまりにすまなそうにするので、亜弓も言葉を尽くして取りなした。だが写真に撮った健康雑誌を買って帰って以来、榊原は店に姿を現さなくなった。

注意を受けたことで気まずくなり、足が遠のいたのだとばかり思っていた。まさかそれを理由に、自ら命を絶とうとするなどとは考えもしなかった。亜弓にとって、榊原はもちろん大切なお客の一人ではある。だが榊原にとっては、仕事帰りに馴染(なじ)みの書店で過ごす時間が、それほどまでにかけがえのないものだったのか。あるいは几帳面な性格ゆえに、知らなかったとはいえ、ルール違反を犯した自分が許せなかったのか。

いずれにしても、だからといってすべてを終わらせる選択に至った理由が、どうしても理解できなかった。思い悩んだ挙句、ふらふらと飛び込んでしまったのか。通話口から響く八幡蓮の硬い声に耳を傾けながら、全身が水に濡(ぬ)れたように冷たく、重くなっていくのを感じた。

ただ一つだけ、救いだったのは、榊原は頭の骨を折る重傷を負ったものの、一命は取り留めたという点だった。ちょうど電車と線路の隙間に体が収まったことで、重篤(じゅうとく)な外傷は免(まぬか)れたのだという。しかし頭を強く打っており、いまだ意識が戻らないまま市内の病院に入院しているとのことだった。

「よく行ってた書店の相良って店員さんに、写真を撮ったのを万引きだと言われて、そんな迷惑行為だとは知らなかったって、凄く落ち込んでいたんです。その翌週に、事故のことを母から知らされて――なんでそんなことでって、意味が分からなかった」

蓮もにわかには事態を受け入れられなかったようだ。しばらく衝撃に打ちのめされていたが、年が明けて、ふと榊原が通っていたという書店に行ってみようと思い立ったらしい。

「榊原さんの代わりに、あの人が通ってたお店を覗いてみるだけのつもりだったんです。でも、相良さんが何も知らないふうで平然と働いているのを見たら、なんだか榊原さんが可哀想で、悔しくなってしまって」

なんでもいいから店の迷惑になることをしてやりたい。そんな衝動に駆られ、万引き行為に及んだのだと打ち明けた。

「待って。じゃあ八幡君は、私が君に暴力を振るった、なんて投書はしていないの？」

慌てて確かめると、蓮は「なんのことですか？」と怪訝（けげん）そうな声で尋ねた。経緯を伝えると、蓮はシティプラザには普段立ち寄ることがなく、《お客さまの声》という掲示板があることも知らなかったという。

「どんな理由があっても、万引きは許されないし、反省しています。

身勝手な考えで相良さんを逆恨みして、迷惑をかけてすみませんでした」

榊原さんにも合わせる顔がないと、八幡蓮は消沈(しょうちん)した口調で付け加えた。

＊

最寄駅に着き、駅裏の駐輪場に停めた電動自転車で保育園へと向かう。余裕があったはずが、蓮とのやり取りで、お迎えの時間に二分ほど遅れてしまった。

「相良さんだけ特別扱いしているって声が、他の保護者の方から出ているんです。園の決まりは守っていただかないと、こちらとしても困りますので。事前に連絡をするくらい、できますよね？」

國村仁美の接客対応で、昨年から何度も遅刻や当日の延長保育を繰り返した。これまでのルール違反をあげつらわれ、副園長から強い口調で注意を受けたが、感情のスイッチが切られたように心が動かなかった。目を吊(つ)り上げる副園長を前に顔を伏せ、機械的に謝罪の言葉を繰り返した。

華菜を連れてスーパーに寄り、疲労に包まれて帰宅したのは六時半過ぎだった。

「少しだけ待ってね。すぐできるから」

手洗いうがいを済ませてエアコンとテレビをつけると、子供向けのアニメ番組にチャンネルを合わせる。何も考えずとも体が動き、時短メニューの夕飯の支度を始めた。

下味をつけた状態で売っていたチキンステーキをフライパンに並べ、焼くのと並行して付け合わせのキャベツを刻む。手を動かすうち、榊原勇雄のこと――なぜあんな対応をしてしまったのかという後悔が、再び湧き上がってくる。

単にルールを知らなかっただけの榊原に、「万引き」などという心ない言葉を浴びせてしまった。親しくしている常連客ということで、気やすさからつい砕けた言い回しが出たのだが、生真面目な榊原からすれば、大きなショックだったに違いない。

ただ、だからといって榊原が電車に飛び込んだという話は、やはり容易（よういに）には受け入れられなかった。あれだけ鉄道好きな彼が、たとえ命を絶とうとしたにしても、そんな方法を取るだろうか。何かの間違いであってほしかったが、八幡蓮が嘘をついているとも思えなかった。

しかし――と、さらに思考を巡らせる。投書を行ったのが蓮でないとしたら、他に考えられるのはあの日、蓮が事務室に連れて行かれたことを把握していた人物だ。事務室のドアは売場に直結してい

るため、誰でも近寄ることはできた。長年一緒に働いてきた同僚が興味本位にやり取りを盗み聞きし、あんな投書をしたとは考えたくなかったが、それ以外の可能性は思いつかなかった。

翌朝、亜弓は重い足取りで出勤した。万引きが起きた日に売り場にいた詩織はこの日はシフトが休みで、顔を合わせずに済んだ。出勤してきた成尾とともに品出しと開店準備をし、午前中は主にレジ応対をしながらタイミングを見て商品整理と品出しの続きをしていた。遅い休憩ののち、午後シフトのアルバイトも出勤してカウンター業務が落ち着いたところで、亜弓は倉庫に籠もって返品作業を始めた。

一般的な小売店などでは馴染みのない制度だが、書店では売れ残った書籍を取次経由で出版社に返品することができる。一定期間内に所定の手続きを踏めば、仕入れの際の代金が相殺（そうさい）される仕組みだ。そのため限られたスペースの棚にどの商品を残すのか、担当者は頭を搾（しぼ）ることになる。

ちなみにこの期間は部門によって異なり、亜弓の担当する文芸書はある程度猶予（ゆうよ）があるが、対して雑誌類は約二か月間と短い傾向にある。雑誌を担当しているのは店長の成尾だが、シフト管理や発注、取次や版元とのやり取りなど管理職として日頃の業務に追われる成

尾は、期限内に返品が間に合わないことがたびたびあった。

一旦は棚から下げた書籍をこのまま返品するか、他店での売れ行きを調べつつ吟味（ぎんみ）していた時だった。エプロンのポケットの中でスマホが震えた。先週採用されたアルバイトの男子学生からの着信だった。

「あ、すいません。なんか相良さんにお願いしたいってお客さんが来てて。國村って言えば分かるって」

舌打ちをこらえて倉庫を出る。ただでさえ気持ちに余裕がない時に、彼女の相手までしなければならないのかとため息をついた。しかも今日は退勤時間の二十分前と、普段にも増して差し迫った状況だ。売場に急ぐと、カウンターの横にいつものダウンコートを着た仁美の姿があった。

「ごめんなさいね。この間、相良さんに勧めてもらった文庫本なんだけど、カバーのところに『フェア対象商品』って書いててね。なんだかホームページから応募すると賞品が当たるみたいで、せっかくだからと思ったんだけど、スマホの字が小さくて読めないのよ」

明らかに書店員の仕事の範疇（はんちゅう）ではないが、「それはお困りですよね。お手伝いしましょうか」と笑顔を作る。注文カウンターに案内して椅子を勧めると、仁美は朱津書店の紙袋から、もたもたした手つきで文庫本とレシートを取り出した。

カバーの見返しの二次元コードを仁美のスマホで読み取ってもらい、必要事項を入力するページに飛ぶ。住所や電話番号といった個人情報を覗くわけにもいかないので、打ち込むのは仁美に任せ、その隙(すき)に日報を書くなど退勤準備を進めた。五分ほどして、「これ、どうしたらいいの？」と再び声がかかった。

仁美が示す項目を確認すると、レシートの画像を送らなくてはいけないようだ。その旨を説明し、「もう一度カメラアプリを起動してもらっても良いでしょうか」とうながす。

「あら、また？　さっきなんとかコードっていうのを読み取った時に、一緒にやれば良かったわね」

二度手間となった時間のロスを悔(く)いる亜弓の心を読んだようなつぶやきを漏らし、仁美は節の目立つ指で画面をタップする。季節柄か、あるいは加齢で指先が乾燥しているのか、なかなか画面が反応しない。「あら」「おかしいわね」「よいしょ」と次第に苛立ったように画面を叩き始めた仁美が、「ああー、やだあ」と大きな声を上げた。

「ごめんなさい。変なところに触って、相良さんが開いてくれた画面、全部閉じちゃったみたい」

笑顔を顔に張りつかせて腕時計に目をやった。もう一度最初から入力し直して送信するところまで手伝っていたら、確実に退勤時間を過ぎるだろう。もう諦めて延長保育を頼むしかない。また副園長

に叱責(しっせき)を受けるにしても、連絡なしに遅刻するよりは、迷惑にならないはずだ。

電話をかけるのに、少し中座させてほしいと頼もうとした時だった。

「じゃあ、今教わった要領で、帰ってから自分でやってみるわね。相良さんはもう、お子さんのお迎えの時間でしょう？」

スマホを手に、すんなりと仁美が席を立った。文庫本やレシートをそそくさと紙袋に仕舞い始めたのを、呆気(あっけ)に取られて見守った。

過去のやり取りを思い出しても、仁美に退勤時間や、保育園の迎えの時間について話したことはなかった。お客にプライベートを明かすべきではないし、接客をする上で急かすことになってはいけないからだ。

亜弓の不可解そうな視線に気づいたのか、仁美は「ああ、店長さんに聞いたのよ」と、少し気まずそうな笑みを浮かべた。

「この間、相良さんがお休みの時にね、他のスタッフの対応も受け入れてほしいって、注意されちゃって。相良さんは小さいお子さんを保育園に預けて働いてるから、退勤時間を過ぎて勤務することは難しいんだって。私、全然知らなくて。いつもごめんなさいね」

「ああ、いえ……とんでもないです」と手を振り、「こちらこそ、お気づかいさせてしまって申しわけないです」と詫びた。

頭を下げながら、じんわりと胸が温かくなってくるのを感じた。成尾はちゃんと亜弓の申し出を受け入れ、毅然(きぜん)として対策を取ってくれた。さらに厄介なお客の当人である仁美も、亜弓の置かれた状況を理解し、心を配ってくれた。

「やっぱり相良さんの説明が一番分かりやすいし、勧めてもらった本もハズレがないから、いる時は頼っちゃうと思う。でも迷惑はかけたくないから、これからは遠慮(えんりょ)しないで言ってね」

荷物をまとめた去り際、國村仁美は「実は注意されたの、店長さんが最初じゃないのよね」とバツが悪そうに明かした。

「先月だったかしら。相良さんが事務室にいるっていうから呼んできてって頼んだんだけど、アルバイトの女の子が、『今、立て込んでるから無理です』って言うのね。だったら終わるまで待ちたいって頼んだら、『そういう一人のスタッフに負担をかける行為は控えてください』って怖い顔で断られちゃって、結局もう一人の社員の人が相談に乗ってくれたのよ」

さりげなく日付を聞くと、仁美は一月の二週目の木曜のことだったと思う、と答えた。そして「これ以上遅くなったら、ほんと申しわけないから」と、慌てた素振りで帰っていった。

以後、退勤時間に余裕を持って業務を片づけられるようになった

亜弓は、格段にストレスなく働けるようになった。

週に二度は来店していた國村仁美は、それからしばらく店を訪れなかった。おかげで効率良く仕事を回せるようになり、退勤前には店長への報告や引き継ぎだけでなく、次回のフェアの相談や、店舗独自のイベントのアイデアを出し合う時間もできた。詩織をはじめとするスタッフたちも何かと亜弓をサポートしてくれて、一瞬でも彼らを疑ったことが恥ずかしかった。

あの投書を行った人物も、その目的も、結局分からないままとなった。特に亜弓をターゲットとしたわけではない、愉快犯によるいたずらだったのかもしれない。

ただ一つだけ、亜弓はもしかしたらという可能性に思い至っていた。しかしこれ以上、相手が何もしてこないのであれば、あえて特定しようとは思わなかった。現在は業務になんの支障もないのだ。きっと向こうの気は済んだのだと捉え、もう考えないようにしようと努めた。

そうして三月に入り、年度末に向け少しでも売上を伸ばそうと売場作りと接客に励んでいたある日のことだった。

亜弓は時間どおり退勤し、駐輪場に向かっていた。今晩華菜を寝かしつけたら、春の別れの季節にぴったりの青春小説のＰＯＰを作成するつもりで、社員割引で新しい画材を購入していた。足早に駅

裏のスロープを下っていた時、スマホに着信があった。発信者は「保育園」とあり、時刻表示に目をやる。まだ迎えの時間には充分余裕があるのにと、訝(いぶか)しみつつ電話に出た。

「――あ、相良さん。今日ってお迎え、間に合いますか？」

副園長が、なぜか焦った口調で念を押してきた。保育園側が、わざわざこんな確認の電話を入れてきたことはなかった。何かあったんですか、とスマホを握り直して尋ねる。

「相良さんのお知り合いだという方が、今日は相良さんは仕事で遅くなるから、代わりに華菜ちゃんを迎えに行くと電話をしてきて……保護者の方から連絡がなければお子さんは引き渡せない決まりだとお伝えしたら、何も言わずに切れてしまったんです」

四

自転車を飛ばし、二分で保育園に着いた。教室で友達や先生と遊んでいる華菜の姿を見て、膝から力が抜けた。

「ママ、ちょっとだけ先生とお話があるから、遊んで待っててね」

抱き上げて言い聞かせると、華菜は「まだ遊べるの？」と無邪気に喜んだ。その後、別室で副園長と面談し、不審な電話について詳しい経緯を聞かされた。

「公衆電話からだったので、番号の表示は出なかったんですが、女性の声でした。相良さんのお名前も、華菜ちゃんのお名前も知っていたので、最初は本当にお知り合いの方かと思ったんです」

副園長は、心当たりがないのであれば、念のため警察に通報するべきかと不安げに問う。

「電話をしてきた女性ですけど、どれくらいの年代だったか、分かりますか？」

尋ねた亜弓に、副園長は自信なさげに首を傾げた。

「そう若い方ではなかったと思います。話し方も落ち着いていて、多分私と同世代かと」

ということは、五十代くらいか。やはり……と、胃が絞られる感覚がした。

「通報は、少し待ってもらえますか。夫とも相談して、改めてお返事します」

タクシーを使うことも考えたが、華菜を不安がらせないよう、人通りの多い道を選んで普段どおり自転車で帰宅した。夕食後、華菜と入浴を済ませ、後片づけが一段落したところに夫が帰宅した。

「寝かしつけ、お願いできる？　職場でちょっとトラブルがあって、電話しないといけなくて」

保育園に不審な電話があったことは、夫にはまだ言わずにおいた。

可能であれば、大事にせず自身で決着をつけたかった。

シティプラザ宛に、亜弓を名指しして汚名を着せる投書をした人物。

深い恨みを抱かれる心当たりがあるのは、今や一人しかいない。ただその人が、本当に望んでいることはなんなのか。目的を見極め、正しく対応しなければ、事態を収めることは叶わないだろう。

亜弓はまず、詩織にＬＩＮＥメッセージを送った。八幡蓮が万引き行為を働いた日、彼が母親とともに謝罪に訪れた際に、何か変わったことがなかったか確認する。ほどなく納得する返答が得られたところで、発信履歴から八幡蓮のスマホに電話をかけた。

「急にごめんなさい。榊原さんにバスで席を譲ってもらった時のこと、もう少し詳しく教えてもらいたくて」

蓮は突然の電話に戸惑っていたが、彼が線路に転落した《本当の理由》が分かるかもしれないと伝えると、覚えていることを話してくれた。それからもう一点、万引き後に謝罪に訪れた時のことを、改めて確認した。通話を終え、いくつか調べ物をした上で、その日は早めに眠りについた。

翌朝。いつもより四十分早く出勤した亜弓は、倉庫へと向かった。空調設備がないせいで底冷えのする床に膝をつき、未返品の在庫の

中から、目的のものを探し出す。あの時目にしたページを開き、内容を確かめた。状況証拠ではあるが、求めていた材料は揃った。

あとはどう伝えるかだが、結果的に、悩む必要はなかった。

彼女は午後四時過ぎに、何事もなかったかのように来店した。

「相良さん、この間はどうもねえ。おかげで当たったのよ、これ。春の文庫フェアの限定ブックカバー」

ピンクと黄緑の、桜餅のような色合いのブックカバーを巻いた文庫本を掲げてみせる。幸い今の時間帯、会計は混んでいなかった。亜弓は『レジ休止中』の札を置くと、満面の笑顔でカウンターの正面に立った國村仁美に、深く息を吸って告げた。

「それはよろしかったですね、榊原様」

*

仁美は笑顔を崩(くず)さず、「どういう意味?」と問うた。

「正確なお名前をお呼びしただけです。以前《分かりやすい法律の本》を買っていかれたので、理解されていると思いますが、旦那さんが意識不明の状態で、離婚の手続きを進めることはできません。もしも勝手に離婚届だけ提出して、旧姓の國村を名乗っているのでしたら、有印私文書偽造で違法になりますよ」

引き上げられた仁美の口角が、すっと水平になる。細めていた目をぎょろりと見開くと、額に深い皺が寄った。

「あなたは、榊原勇雄さんの奥様ですよね。私の不用意な一言で、旦那さんが電車に飛び込んで自殺を図ったと思い込んで、報復したかったんでしょう」

状況だけ見れば亜弓はマナー違反を注意しただけだ。到底店側の責任を問うことはできない。正面から抗議できない鬱屈(うっくつ)を、何かの形でぶつけなければ収まらなかった。

「最初は職場の書店を訪れて、それと分からないような形で嫌がらせを――接客に手間取り、残業するように仕向けることを繰り返した。さらには事実と違う内容の投書をして、私の評判を落とそうとした」

仁美がこの店を訪れるようになったのは、昨年の秋。榊原勇雄のデジタル万引きを指摘し、彼が姿を見せなくなってからだ。

最初に来店した日、仁美は「國村」という苗字を「村國」と書き間違えた。昔からよく逆に書いてしまうのだと言いわけしていたが、いくらそそっかしい人間でも、そうそう書き慣れた自分の名前を書き誤ったりはしない。あの時、仁美は「榊」と本来の苗字を書きかけて、正体がばれないようにごまかしたのだ。

昨日、詩織に確かめてあった。八幡蓮が万引きをした日に、仁美は

来店していた。亜弓の退勤後、万引きの謝罪に訪れた八幡親子に、仁美は知り合いのような調子で話しかけていたという。

おそらくあの日、蓮が事務室に連れて行かれるところを、最初から仁美は見ていたのだ。そしてご近所のよしみで素知らぬ顔で蓮に近づき、手の甲の痣に気づいて理由を尋ねた。昨晩蓮に確認したところ、万引きをした事実までは話さなかったが、貧血で倒れて床にぶつけたと正直に説明したという。

「だけど投書は信用されず、接客をさせる嫌がらせも封じられた。それでもなんとか遺恨を晴らしたくて、最後には店長から知らされたプライベートな情報を逆手に取って、私の家族にまで近づいた」

成尾もさすがにどこの保育園に通わせているかといったことは話さなかったはずだが、退勤後の亜弓を尾行すれば、簡単に辿り着けただろう。華菜の名前は、亜弓が呼びかけるのを聞いたのかもしれない。

「未遂(みすい)でしたけど、もしも娘を連れ去っていたら、重罪に問われるところだった。そこまでするのは、榊原さんがもう、失うものがないほど追い詰められているからですよね」

亜弓はついに核心に触れた。なんの話かしら、と虚勢(きょせい)を張る仁美に、彼女がここまでのことをするに至った動機――考えを尽くして辿(たど)り着いた結論を突きつける。

「鉄道を止めたことに対して、賠償金を支払わなくてはいけないんでしょう。何百万という金額になるというのは、有名な話です。ならばいっそ離婚して責任を逃れたかったのでしょうが、それも法的に許されていない。自暴自棄になるのも当然ですよね」

「分かってるなら、わざわざ言わないでよ！」

肩を震わせた仁美は、亜弓が何度となく彼女にぶつけたいと願った台詞を口にした。《サトリ》の立場が逆転した状況が我ながら滑稽で、こんな時なのについ笑みが浮かびそうになる。仁美はいっそう眉を吊り上げ、鼻の穴を膨らませた。ますます《サトリ》じみた顔貌から視線を外して口元を引き締め、「でしたら――」と続けた。

「もしも賠償金を払わなくて済むとしたら、考えを改めてもらえますか」

亜弓の言葉に、仁美が体を硬直させた。小さな瞳を泳がせ、カウンターに置いた拳を握り込む。

「……そんなこと、できもしないくせに」

唇を歪め、低い声で吐き捨てた。予期していた反応を受け流し、亜弓はカウンターの下に準備していたものを取り出した。

「こちら、昨年の秋に榊原さんがスマホで写真に撮った、健康雑誌です」

仁美に見える向きに置く。店長の成尾がいつものごとく返品し損

ね、倉庫に残っていたバックナンバーだ。
「そんなもの、見たくないわよ。あの人が電車に飛び込んだ時、荷物の中にあった雑誌じゃないの」
仁美は不快そうに雑誌を押しやった。榊原が事故の際も持ち歩いていたというのは、思わぬ情報だった。
「でしたらそれ、証拠になるかもしれませんよ。榊原さんが故意に線路に転落したわけではないと、主張できるかもしれません」
昨晩、蓮から榊原にバスで席を譲ってもらった時、どんなやり取りがあったか聞き取っていた。貧血を起こした蓮に、榊原は自身も立ちっぱなしでいるとよく具合が悪くなるので、辛さが分かると語っていたらしい。
「榊原さんは、ご自分の症状に悩み、対策しようとしていたんです」
榊原がわざわざ写真に撮った特集ページを開く。そこには『迷走神経反射の仕組み・対処法』という見出しが踊っていた。あの時、知り合いに教えたいと話していたのは、おそらく蓮のことなのだろう。
「こちらはずっと同じ姿勢で立っていたり、ストレスや緊張といったことが原因で、脳貧血を起こして失神してしまう症状です。本人の意思と関係なく突発的に起こるため、防ぎようがありません。榊原さんがこの症状のために線路に転落したのであれば、故意ではなく事故です」

事故の前、榊原はそうとは知らずに万引きに相当する行為をしてしまったと落ち込んでいた。そのため蓮や妻の仁美は、真面目な彼が自身を追い詰めた結果、死を選んだと思い込んだのだろう。

「榊原さんが症状を抱えていたことは、この雑誌を購入した事実に加え、スマホのデータに撮影した画像が残っていれば、それも根拠にできるかもしれません」

もちろん、榊原が早く意識を取り戻し、自ら説明できるようになるのが一番だが、ひとまず状況証拠を揃えて、弁護士に相談してみてはどうかと提案した。その上で――と、今後のことについて持ちかける。

「二度とこの店に立ち入らない。私や私の家族に近づかないと約束していただけたら、あなたにされたことは不問にします。私が軽率に発した言葉で旦那さんを傷つけたことは、深く悔やんでいますし、体調を崩して線路に転落したのも、そのことがストレスになったせいかもしれませんから」

最後に自らの行いを省(かえり)みた亜弓に、榊原仁美はなんの含みもない、心から安堵した表情で言った。

「相良さんは、やっぱり頼りになるわあ。いいわよ、それで。今まで色々とお世話になったわね。本当にありがとう！」

胸の前で少女のように両手を組むと、一切の心配事が消え、心が

軽くなったとばかりに頬を緩ませる。長年連れ添った夫が意識不明という状況で、賠償金を払わなくて済みそうだと分かった途端に、ここまで晴れやかな顔ができるものなのか。薄寒いものを覚えながら、足取り軽く去っていく仁美を見送った。

毒気に当てられたのか、全身が鉛のように重く疲労していた。だがその底には、かすかな達成感が漂っていた。

緊張に凝り固まった首を回し、横を見ると、開いている二台のレジに列ができている。亜弓は『レジ休止中』の札を下ろし、「次にお並びのお客様ー」と声を張った。

【了】